

フィリップ・パーク教授退職記念号によせて

法学部長 橋本信之

2001年3月、私たちの深く敬愛するフィリップ・パーク先生が本学をご退職になりました。先生のご在任中のご活躍と、本学への大きなご貢献に感謝して、『外国語外国文化研究』のご退職記念号を出版する運びとなりました。

フィリップ・パーク先生は、1993年、本学部初めての宣教師として、英語教育も担当する教員として着任され、助教授、教授として8年間、本学において、宣教、教育、研究に携われました。先生は、宣教師として、学内、学外で、宗教的感化を及ぼされ、多くの人に感銘を与えられました。英語教育など教育面でも、本学部初めての外国人専任教員として、貴重なご貢献をなされました。

先生は人権擁護に強い関心をもたれ、とくに民族的、文化的理由による差別に強い問題意識をもたれていました。先生のご研究はキリスト教活動を時代の背景の中でとらえるというアプローチを試みられますが、それは、アメリカ合衆国において民族的マイノリティとして過ごされたことからくる深い問題意識に基づいているようにお見受けしました。そして、そこから、民族的、文化的多元性を保ちつつ、相互の立場を認識しあい、人権を尊重することが、先生のご活動を終始貫くものとなっていたと思われまます。

先生は教授会に熱心にご出席になられ、人事案件に関するご自身の投票権に関しては鋭い問題提起をなされました。先生の任用に際して、宣教師であることから、人事案件についての投票権を認めないとしていたのですが、先生はそれにご不満ということではなく、アメリカ合衆国におけるマイノリティへの差別を想起させる扱いのように感じるとして、説明を求められたのでした。本学部教授会は合

理的な理由のあることと考えていたのですが、先生の問題提起に深く触発され、組織として、自ら定める制度について問題意識を深めることができたのでした。

先生は、体調を崩されてアメリカ合衆国に帰国され、養生をされつつ、退職を迎えられることになりました。先生にとって残念なことだったと拝察いたします。

現在は、体調も回復してこられているようですが、今後のご健勝と、一層のご活躍を念じております。